

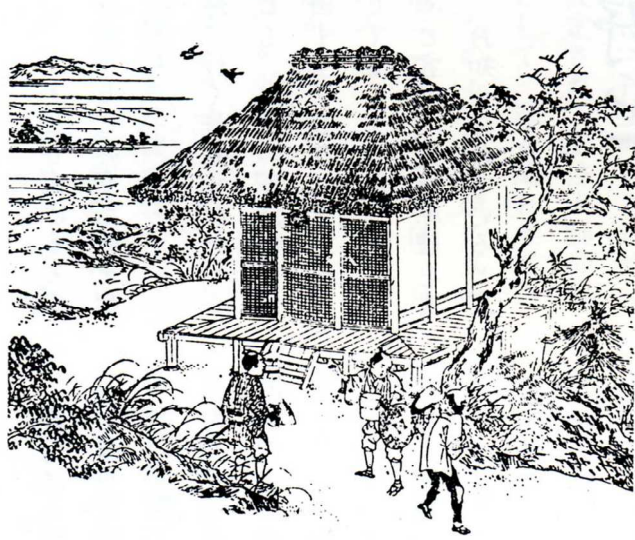
天野西行堂について

谷口 正信

天野の里、丹生都比売神社の西方、約五百米、小高い岡の上に西行堂及び妻娘の墓と伝えられる塚が残っている。

この墓の下に妻娘が尼となって住んだ庵があつたと里人は言い伝えている。

昔より守つてきた西行堂について、天野に残る文献や、その他の資料をもとに考えてみたい。



「紀伊國名所圖會」より

最初に西行法師生存中の天野における出来事と、西行堂に係する事項を年代順に列挙してみる。

康治元年（一一四二）

西行の妻、尼となり天野に住む、貞信尼と称す。

久安三年（一一四七）

御室御所覚法法親王、高野参籠途中天野社参詣、久安六年まで五回。

この頃、中納言局が天野に移る。

久安五年（一一四九）

中納言をたずねた師の局そぢと、高野山より下山した西行と天野で会う。

仁平二年（一一五二）

西行の娘も尼となり、天野の母と共に住む。

治承三年（一一七九）

有王丸天野で住む。

治承四年（一一八〇）

横笛天野に住む。

文治四年（一一八八）

齊所権介成清、天野社頭で子寂阿弥と面会する。

正治元年（一一九九）

西行娘天野で往生、八月彼岸の頃。

建長の始頃（一一五〇）

天野里人西行堂を建てて。

応安五年（一一三二）

妻娘の墓に宝篋印塔を建て供養する。

文安六年（一一四九）

全右

明暦元年（一六五五）

西行堂荒廃する。

寛文十年（一六七〇）

西行堂再建。

享保末頃（一七三〇）

以雲、天野西行堂で歌をよむ。

文政六年（一八二三）

西行堂修理。

弘化四年（一八四七）

西行堂木版出版する。

昭和六十一年（一九八六）

西行堂再々建。

一、西行法師生存中の天野

西行が出家したのは、保延六年（一一四〇）が定説である。発心集によると、

「西行出家しける時（中略）かくてここかしこ修行してありく程に、はかなくて二・三年になりぬ」

そのとき、妻はすでに娘と一緒に生活はしていない。そして、「西行物語」（四七）によると、

「さても、さばかりいとほしがらせ給ひし姫君の事、いとほしさよ、御出家ののち、やがて母御前も様変えて、一・二年は姫君と一つ所におはせしが……中略……そののち母御前は、高野のふもと天野といふ所に行ひておはしき……」

と述べていることより、妻が天野に庵を結んだのが、西行出家の二年後の、康治元年頃と考えていい。

現在庵は残っていないが、昭和初期には、小高い庵の場所と、その下に西行が狭田はなだと称される小さな田が残されていた。

この時代の天野は、高野参詣の道中の土地であり、天野社の名と共に都でも知られていた。このことは、寛治二年（一〇八八）白河上皇、天治元年（一一二六）鳥羽上皇の高野山詣での途中、天野社参詣等によつ

ても明らかであり、西行の妻も高野山のふもと、天野の里を遁世の場所として選んだのは当然の事であろう。

待賢門院に仕えた中納言の局も天野に移り住むことになったが、窪田章一郎氏著『西行の研究』（二四〇頁）によると、待賢門院璋子没後（久安元年）中納言の局は、一年の喪に服した後、小倉に住んだが、そこより天野に移ったのが久安三年（一一四七）頃、そして西行が高野山に移ったのが久安四年（一一四八）頃と述べているが、西行と関係の深かった中納言の局であるので、西行と相前後しての転居と考えられる。

「山家集」によると、

小倉を住み捨てて、高野の麓あまのと申山に住まれけり、同じ院の師の局、都の外の住所すまか訪ひ申さでは、いかがとて分けおはしたりける。ありがたくなん、帰るさに、粉河へまゐられけるに、御山より出であひたりけるを（下略）」

中納言を見舞い、師の局と西行と合ったのはどことい言い伝えも記録もないが、妻娘の庵であったかも知れない。

ただ、中納言の局の墓らしきものが、西行妻娘の庵の上方・約百米の所に塚が残っているが、里人は待賢門院の墓と称している。

仁平二年（一一五二）頃に、西行の娘も十五才程にて尼となり、天野の母の許で住んだことは、「発心集」（五）に、
さてさて此の娘尼になりて、高野のふもとに天野と云ふ所にさいだちて、母が尼になりて居たる所に行きて、同じ心に行ひてなむありける
と述べている。

母の入寂の年はわからないが、「西行物語」によると、

かの娘の尼を善知識として、終るをかねてより、多く念仏やむ事なく、眼るがごとくして往生を遂げにけり。娘の尼も、一生不犯ふぼんの身にて、正治元年八月彼岸の頃、これも往生（下略）
娘の尼は六十二、三才で往生したことになる。

西行の妻が尼となりてより娘の尼の往生するまでの約五十年間は、天野への遁世者も多く、現実社会と仏門の接点としての天野を位置づける言い伝えも多い。

有王丸が俊寛の姫君と共に天野の別所に住んだという「源平盛衰記」。滝口入道を慕って横笛が天野の里で、十九才ではかなくなったという横笛の恋塚「高野春秋」。齊所権介成清が、出家したわが子寂阿弥と天野社頭で涙の出合いをしたという「発心集」。鬼王団三郎が主の骨を高野山に納め、天野で終った「紀伊続風土記」等々。

それらは真実でないものもあるかも知れないが、当時の天野は、都でも宮中でも知られていた地であったことを物語っている。

久安三年五月二日より、久安六年七月まで四年間に、五回にわたる御室御所覚法親王が高野山に籠ったが、「山籠日記」（又続宝簡集三〇）によれば、最初の登りは九度山慈尊院を通ったが、以後は三谷・天野・高野山の道順をとっている。文中に、

三谷坂、木影而無深泥道程近（下略）

そして山籠の行き帰りに天野社に参詣し、種々の物を貢ぎ、八乙女の舞等奉納している。

天野の神主も当時は三谷に住み、この道を祭事毎に登り、常住するようになったのは建治二年（一二七六）八月二十六日よりのことである。

従ってこの時代の高野山の表街道は、三谷、天野、高野山であったと言えよう。

二、天野西行堂のその後

西行入寂は建久元年（二九〇）娘の尼往生は正治元年（一一九九）庵の上に妻娘の墓があり、庵の朽ちると共に墓の横に里人が西行の徳をしのび、堂を建てたのが天野西行堂の始であると伝えている。一二五〇年頃であろう（資料一西行堂記）

その後修復をくり返しつつ維持して来たが、参拝者も多く応安五年（一三七二）文安六年（一四四九）に妻娘の墓に宝篋印塔を建て供養されて

いる。四基ある内、応安四年と五年の塔が和歌山県文化財に指定されている。（内容について後記資料二参照）現在所在地が変えられている。

天野西行堂は、修復や供養には常に高野山がかかわっていた。奥の院より、西行堂のお供え等に使用する米を作る田が与えられていたことは天文二十一年（一五五二）の又太郎作職売券（後記資料三）によっても明らかである。

伝承ではあるが「紀伊国名所図絵」（二）の西行堂の絵の中の文に、

堂の前に西行が狭田はさまたといふあり、その田今に蛙なく事なし

西行がたまたまつくるはざまだの

尻のせまのひるぞかなしき

と記されているが、これは西行が妻娘の庵にて歌を考える最中、蛙があまりにやかましいので、験力により、西山の方の蛭むしと、狭田の方の蛙をとり替えたと言い、それ以後西山には蛙が多く、狭田近くには蛭が多くなったと言われている。

西行が米を作ったと言うが、西行堂へお供えの田の事が、この伝承につながったと考える方がよいのではなからうか。



西行堂の掛軸より

江戸時代に入り、明暦のはじめ（一六五五）堂は荒廃、草地と化した
が、高野山の僧が中心となり、寛文十年の暮復興・再建した。その時の
ことを板に記し堂にかけたのが西行堂記（資料一）である。

それ以後、高野山側でも西行堂を重視し、「天野両法会雜記」（高野山
図書館蔵）によると、毎年行なわれる天野社における六月会の内、六月
十六日は、高野山南谷の僧侶は西行堂におまいり供養することに定めら
れていたようである。（後記資料四）

なお天野社での四月七日吹送り神事により始まり六月十八日に終る葛
城修験者の行事は、五月四日より葛城二十八宿四十九院を巡るのである
が、天野における行場の中に西行堂もあげられている。

一七三〇年前後であろうか、西行研究僧の以雲が、天野の西行堂に詣
でて、一首を詠じたのが「紀伊名所図絵」（二）六九三頁に記されている。

西行法師、のりきよといひしときの妻、尼となりて天野にすまれし
あととて、今に草庵あり、秋のころ
なく虫の 草にやつれて いく秋か
あまのに残る 露のやどりぞ 似雲

文政八年（一八一三）西行堂が再度破壊し高野山如意輪寺・前官弘栄
（第三百四十九世寺務検校）の世話により修造が加えられ、その事情を、
前の西行堂記の板に裏書として、高野山無量光院乗海（第三百五十七世
の花園をつとめる）により記されている。（後記資料一）

その後弘化四年（一八四七）に、杉本林蔵氏によって、紀州伊都郡天
野村・西行上人旧跡之図の版画が、東都純澤筆によって出版された。西
行法師六百五十年法要を行った四年後である。

それ以後朽ちるにまかせ、明治中頃には姿も消えたままであった。昭
和六十一年、里人の望みも叶えられ、高野山・天野の人々の力により再々
建された。「紀伊名所図絵」の西行堂を参考にしたお堂である。



杉本林蔵氏の版木・西行堂

資料一 「西行堂記」 （杉本温子氏所蔵）

西行者武衛萩尉康清子藤秀郷九世
之孫也俗名（以下略）

（中略 二十一行アリ）

紀州天野丹生祠之西有西行堂村民
相伝西行与妻及女於是締草庵念
経修定又有余力則登高野山拜高

祖之聖廟如是年久而遂則斯処而寂郷人慕其徳為之誅芽擬影堂云其後廢興止一兩度而已哉明曆之初又為荒草之地今茲春三月當山学侶感慨之余戮力復旧制且有入新畫西行及妻子之小像掛之壁間後七行略

寛文十年暮陽之日高野山沙門謹書

「西行堂記裏書」

此庵数度興廢今亦殆將破壊然無加修造人焉如意輪寺前官弘栄深悲之而以尋此庵事曆事載而有年預坊大条於是入書於年預坊碩老議而曰

(中略 四行アリ)

修造予心前宮言粗記事由以而裏書示後者而已

于時

文政六龍集癸未林鐘之日誌之

高野山無量光院乘海

塔身高さ巾共二三糎で各面輪廓をまき、内部を舟型にくぼめたところに釈迦、定印弥陀、弥勒、薬師の各座像を浮彫りにしている。その内部は、無地、高さ三三・五糎、相輪完存、銘文は基礎一面にあり、十三行あるらしく、細字多く彫りが浅い為、完読不可能で三行目と十二行目、十三行目の一部が読めるだけ。

三行目 十方靈

十二行目 願

十三行目 応安四年

和泉砂岩製塔身一部欠損ある以外完存

一四一糎基礎二段、側面四面無地、高さ三四糎巾四三糎、塔身は各面輪廓をまき、内部を舟型にほりくぼめて、現在、北釈迦、東薬師、南蓮華をもつ観音、西定印阿弥陀の各座像を浮彫りにする。高さ巾共二二糎、笠は下二段上六段隅飾直立し一弧輪廓付、内部表面、相輪完存、前記の塔と大同小異銘文は基礎一面にあり、二行まで不明。

三行目 偏阿弥陀仏

比丘尼覚念并立澄

為乃至法界平等

利益也

応安五年壬子三日五日敬白

三番目は少し小さく、四番目は相輪を失っているが現在高四五糎の小印塔で基礎一面に次の銘がある。

祐阿弥陀

仏

文安六年

正月廿四日

資料一 宝篋印塔 二基 (和歌山県指定文化財調査報告書)

総高一四五糎・基礎上端一段・側面四面とも無地、高三五糎巾四三糎、

(近畿民俗学会調査)

資料三「又太郎作職売券」

(丹生広良氏文書)

ウリわタシ申候タノサクノ事

チリワラクノインテン

イチ石三斗ニテソ口、ウワマイハサイキヤウトウノヲコナイノモチノ

米三斗マタ五升ハコヲウツエ五十ホン、サンシニテウ、コマサーソク

ヒカシハキシヲカンキテ

ミナミハカワヲカンキテ クノセマチノ 西八ミチヲカンキテ

カツミツ

キタハミチヲカンキテ 大クトノ

サクノレウソク カウチウニンヤセ

合五貫文ウリ申候コト マタ七

マコトナリ、ヨツテコ日ノシヨウモンクタンノコトシ

ネンキ八十年キリ、子ノトシヨリイヌノトシノハルモトルヘシ

天文廿一年二目廿一日センフクイン又太郎

(略印)

資料四「天野兩法会雜記」

(高野山図書館蔵)

六月会 (前・後略)

一十六日朝鐘定、透廊へ出仕、供養法、法眼著座ノ上、理趣經二卷、讚・廻向・慈救咒等、如二前日一

一同日、西上剋鐘定、床中透廊へ出仕、法眼著座之上読經世、供養法等如二前日一

但、同時三南谷分手ノ衆ハ不レ到ニ神前ニ一鐘ヨリ直ニ西行堂へ出仕シ

趣經一卷、讚、回向、光明真言読議了テ帰宿ス

附り前官 法眼 法橋之鉢ハ 以テ二名代ヲ一勤ムレ之

尤モ西行堂ノ杏花、燈明等、從リニ古来ニ天野田了調フレ之ヲ 下向トシテ毎

六月八木三器自ニ年預一渡スレ之ヲ

(注) ワープロ・ソフトの関係で、右の資料における表記は、次の通りである。
一は、二が一の右に、一が二の左に並列して書いたもの
△は、△がレの右に、レが△の左に並列して書いたもの
テ二は、テが二の右に、二がテの左に並列して書いたもの
フレは、フがレの右に、レがフの左に並列して書いたもの